

J08-04 オアズマンシップ

Oarsmanship

ロウイングは、全力で漕ぎ果てるロウアウト精神や、クルーとしての一体感を培います。しかしそれだけでなく、おごりを捨て、強さに関係なく人を思いやる気持ちの成長も試されます。

1 語源

オアズマンシップというのは、英語の本来の意味は、ボートを操る「技術」のことです。このスポーツの起源となったテムズ川で、職業として船を漕いでいたウォーターマンに由来し、ウォーターマンシップとか、シーマンシップとも言われます。精神的な意味合いよりも、艇を操る技術の意味です。

しかし、日本では、これにスポーツマンシップと同様の精神的な意味合いを加えて用いてきました。ここでは、その慣例に歩み寄り、ロウイングというスポーツの精神世界を少し紹介しておきましょう。

2 スポーツマンシップ

オアズマンシップは、スポーツマンシップと同じく、このスポーツを愛し、ルール、マナーを守り、競漕相手や運営スタッフなどに経緯を持って行動するフェアプレイの精神、全力でベストをつくすロウアウト精神、チームワーク。そういったものと同じことですが、以下、いくつか特有の表現、考え方を紹介しておきましょう。

3 ロウアウト精神

全力を尽くすこと。レースの最後の瞬間、フィニッシュまで漕ぎ尽くし、果てようとするのがロウアウト精神です。レースにどのように取り組むかは、クルーの勝手、スポーツの自由という側面もあります。しかし「全力を尽くさないことは、全力で競おうと練習し向かい合う競漕相手に対し失礼だ」という発想のほうが、よりマナーとスピリットのレベルが高いと言えるでしょう。スポーツとしての自由と、競漕の礼儀のバランスを探りましょう。



(nlroei より)

補足：ただし、運動生理学的には、フィニッシュの瞬間、急に動作を完全停止すると、それだけで心臓に負荷がかかり、一見ロウアウトしやすくなります。というか、昔はそのメカニズムがわかっておらず、ロウアウトをしていたくらいがあります。フィニッシュの瞬間に完全停止せず、緩やかなノーワークに移行することが、体のためには重要です。

4 一艇ありて一人なし

これも語源は異なるのですが、今では「一つのボートを漕ぐクルーに、ばらばらの個人はなく、一心同体だ」との意味でよく使われます。乗艇し、一緒に漕ぐ間は、動作を一つにし、漕ぐことに専念する、そんな気概、一体感がロウイングにはあります。

このように動作をそろえるタイプのパワースポーツではそれほど多くはありません。このユニフォームもまた、先に述べた、ロウアウトと含め、ロウイング特有のスピリットを形成しているといえるでしょう。苦しくて漕ぎやめたくてもやめるわけにいか

ない、ボートの中で、自ら進んで歯車の一個となり全力を尽くすことが、精神を鍛えます。妥協せず、苦しい練習に耐え抜く。クルーで一体になってがんばる。それはとても素晴らしいことです。厳しいレースに臨み、全力で取り組むことは、そのクルーや選手本人にとっては、とても素晴らしい価値観であり、それを人生の礎とするのは本当に素晴らしいことです。

別の言い方をすれば、「ロウイング(クルー)に、エースもヒーローも要らない。」ということでもあります。

エピソード: スティーブ・レドグレイブは、84年から連続5回の金メダルを獲得した英国の偉大な漕手です。糖尿病と戦いながら金メダルを得たシドニー五輪の優勝会見での言葉：「競技を終えたら、レースに出た選手全員と互いに健闘をたたえ合いたい。僕らはメディアに話をするために競技しているのでは決してない」と、立派な表彰ステージの勝者と敗者のメディアの扱いの落差、それに引きずられる大会運営への苦言でした。レースの前・後、勝者も敗者も関係なく、平等・公平な運営がなされ、スポーツマンシップが健全に維持される、クラブや協会、大会の運営にもまたオアズマンシップが問われなければなりません。(参考：共同通信社ウェブサイト「シドニー日記」9月24日、「五輪選手はみな平等ノ王者の気骨に触れる」より)

5 みんなのためのスポーツ

Rowing For All

以上のようなことから、この正統の競技スポーツに、エリートあるいは、ハードネスに耐える限られた人間だけに許されたスポーツといったイメージを重ねる人もいます。個人がどのようなイメージ、プライドを持つかは全く自由です。しかしその発想が、もしエリートだというおごり、うぬぼれや、だめなヤツはこのスポーツをする資格はない...というような人を蔑む発想に陥るとしたら、それは大きな間違いです。

自分の大切なプライドや価値観を、他者に当てはめて足枷(かせ)にはいけません。スポーツとしてのロウイングは、懐を広くして、漕ぎたい人の誰もが、「ルールとマナーを守る限り」、その人なりにできる範囲で、できるなりのスタイルで漕ぐことができる、そんな世界でなくてはなりません。

自己のロウイングあるいはスカリングから、クルー、チームワークへの意識の発展は、さらに拡大すれば、隣人のロウイングを支援する意識になります。

ジュニアのみなさんの中には、自分の、あるいは自分のクルーの向上だけに専念し、それで精一杯という人もいます。また、それ以外のことに眼を向けるのは、オアズマンとしてベストを尽くすことができていないような脅迫観念にとらわれている人もいます。

しかし私は、ジュニアのうちから、自分自身を鍛えることだけに終始せず、周囲に眼を配り、強くクルーを導き、また同時に、周囲の弱い人や、漕ぎたくても漕げない人に、同じ目線で、手を差し出してほしい、と思います。それは、短い視野で見れば、練習時間が削られて、少しタイムの短縮が先延ばしになることかもしれません。

しかし、人生のスパンで見れば、そのロウイングスタイルはきっと、あなたのロウイング自体をより高いレベルに到達させる支えとなるでしょう。またそれ以上に、きっと人生の中で意味のある経験になるでしょう。